

## 「19世紀初頭の東南アジア貿易の実態解明—輸入と消費に着目して—」

Empirical Study of Southeast Asian Trade in the Early Nineteenth Century: Focus on Import and Consumption

小林 篤史 (KOBAYASHI Atsushi)

近年の東南アジア経済史では、19世紀以降の近代貿易の成長要因を再検討する研究が活性化している。それら研究は18世紀末から19世紀前半の東南アジア貿易が拡大していたこと、そこでローカルな域内交易や現地商人たちの活動が重要であったことを指摘し、西洋植民地化の影響にとどまらない、長期の19世紀を通じた地域経済の自律的な発展を主張している。しかし、重要な時期である19世紀初頭の東南アジア貿易の実証研究は、資料不足により進んでおらず、新たな研究潮流にとって大きな課題であった。本研究はこの課題に対して、これまで注目が薄かった「輸入と消費」に着目し、東南アジアだけでなくインドの資料も活用することで、解決を試みた。

第一に本研究が解明したのは、18世紀に構築された東南アジアの多角的な貿易関係は、19世紀初頭にもその重要性を継続していたということである。当時、東南アジア地域はインドからの綿織物の輸入と引き換えに、中国向けの現地産品を輸出しており、アジア域内交易に統合されていた。そして東南アジアでは貿易に伴う高い情報・交通コストに対応するため、リアウやシンガポールなど港湾都市が中継港として発達した。こうした多角的な貿易関係や貿易ハブとなる中継港といった特徴は19世紀を通じた東南アジア貿易の成長の基盤となったのであった。

第二に、東南アジアとインドの貿易統計を駆使したことで、19世紀初頭の東南アジア貿易は増加傾向にあったことが示された。東南アジアではインドから輸入される綿織物は、現地住民の服飾品として大きな需要があり、人々はインド綿布を購入するため中国向けに輸出される商品作物を積極的に栽培した。そこで本研究は、現地住民の生産活動にも刺激を与えた綿布を中心とする消費財の輸入に焦点を当て、その主な供給先であったインドの貿易統計を活用した。1800-25年にかけてインドから東南アジアへの輸出額（東南アジアにとっては輸入）は増加しており、特に綿織物の輸出が大きく伸びていた。東南アジアにおける綿布輸入の増加は、現地住民の生産活動への刺激と輸出拡大にもつながったと推測される。

第三に、東南アジアではインド綿布の持続的な流通が、貿易成長を支えていたことが判明した。従来は19世紀前半にイギリス綿工業品が東南アジアに流入したことで、インド綿布は流通から排除されたと考えられていた。しかし、東南アジアの資料とインド貿易統計によれば、インド綿布は19世紀中葉まで東南アジアに流入し、イギリス品よりも質の良い商品として現地住民に好まれていた。こうして消費財の嗜好性という地域市場の状態が、東南アジアの多角的な貿易関係を支え、近代貿易の成長につながったのであった。